

第一五話 初めて星を見たころ

天文学を始めたばかりの私はカノープスを見たことはありませんでした。それはまだ若かったので「老人星」にはあまり興味が湧かなかったことと、家が上町の竜馬の生まれた家の近くにあって、ここからは南に聳える鷲尾山に隠されて見えなかったのです。

初めてカノープスを見たのは一九六五年一〇月、須崎市に聳える標高七六九メートルの蟠蛇の森の上からでした。その頃、私たちの発見した「イケヤ・セキ彗星」が太陽に突入するという前代未聞の事件が起こり、彗星が爆発して消滅するのか、それとも太陽に異変が起こるのか、と言うので多くの天文学者が注目し、正に世界を震撼さす出来事が起ころうとしていたのでした。

宇宙を何万年かさまよい、苦勞して発見したその彗星が、太陽突入によって終焉を迎えようとしているとき、私は居ても立っても居られない気持ちになって高知県で最も星の良く見えると言われる蟠蛇の森にやって来たのです。そして初

めて見るカノープスの巨光に驚き感激し、じっと手を合わせ
て「どうか彗星が無事でありますように・・・」と、彗星の
長生きを願っての祈りを捧げたのです。その祈りが通じたの
か、その直後、ハワイのマウナケア（いま日本のスバル望遠
鏡がある）の頂上で驚くべき現象が目撃されたのですが、そ
のお話はまた後で詳しく語ることにして、今日は私が初めて
星に憧れたころのお話をしたいと思います。

物語は今から半世紀以上も昔に遡るのですが、私の父は高
知市の米田の出でした。毎年初冬のお祭りのある頃、父に連
れられて田舎に遊びに行っただけです。その帰り道の事です。
提灯を持って暗いあぜ道を歩いていた父が突然足を停めて、
「ほら勉、見てごらん三ツ星だよ」と言って低い山の上を指
差しました。

それは始めての星との対面でした。赤鬼山の稜線の上は山
の輪郭でさえも判然としない真っ暗闇ですが、煌めく無数の
星の中にとりわけオリオンの「三ツ星」だけがきちんと並び
群を抜いて明るく逞しく輝いているのでした。

父は若い頃砲兵だったそうで、善通寺の第一師団での兵役では夜の訓練で方角を知るために星を習ったそうです。多くの一等星を覚え、それらの配列から北極星を見つめる訓練を行ったと言います。親戚の家から電車通りまでの僅か一キロ程の道のりでしたが、星の話ばかりしながら帰った楽しいひと時でした。

父の話の中で、特に興味を持ったのは明治四三年に現れたハレー彗星のことでした。ハレー彗星は七六年で太陽を一周しているのですが、その年の五月には異常に地球に接近し、まるで空を泳ぐ巨大な竜の姿となって地上に迫り多くの人を恐怖のどん底に落とし入れたそうです。

父の見たハレー彗星から実に七六年、一九八六年のハレー彗星接近の時には、私は南方のある孤島でこれを観測していました。南十字に懸かるハレー彗星の姿はとりわけ美しいものでしたが、こうして私が天文学をやるようになったのは父の影響もありますが、若い頃の一つの出逢いがきっかけでした。

人生と言うものはまことに奇なるもので、ある出来事との

出逢いによって、わたしは一生星を見つめる運命となったの
です。